

文人でもあった田村雄一先生の思い出

(NPO 法人) ユーラシア 21 研究所 客員研究員 徳田八郎衛 (1961 年卒)

口下手という表現がある。辞書によれば「話すことが不得意で、思うことをうまく人に言えないこと。また、そのさま」であるが、場合によっては追従（ついしょう）やおもねりが言えない人も指すようだ。昭和 32 年から同 43 年まで地球電磁気学講座（第 5 講座）の主任教授を務められた田村雄一先生は、正に両方の意味で口下手だった。最近流行の「口下手を克服して会話上手になるセミナー」主催者などは、訥弁を不名誉なことのように思っているようだし、確かに受講者や見学者、あるいは財政当局や政治家に専門的な事項を判り易く、そして限られた時間で伝えるには流暢な話し手の方が好ましい。だが口下手な方の説明を聞いていると、微笑ましくなり好感を抱くことも多い。田村先生は、次の言葉が出てこない時は、「けれどもが一、しかしー…」という接続詞を連発され、我々学生どもは「もし英訳するよう命じられたら、お前どうする」とささやいていたが、後に私が英訳をやらされたときに、本当の話になる。

私が院生になってからであるが、パキスタンからの客員研究員が 1 年間滞在され、田村先生から千円札を 1 枚渡されて（今の 15,000 円に相当？翌日、200 円ほど返納した）奈良へご案内したのがご縁で、このシルガオカさんが日本語の会議や式典で退屈されないよう、頼りない私が即時通訳を務める破目になる。大真面目に”However, …… though”と伝えたが、田村先生のゆっくりした訥弁は、三流通訳には天の助けであった。もちろん地球電磁気学概論のように、永年手がけてこられた講義では「けれどもが一」の状態に陥ることはなく順調に進むのであるが、式典や仲人の場ではこの語が必ず登場した。私も生涯を通じて、このような場の司会や挨拶は苦手なので当時も今も田村先生に同情している。

今も印象に残る場面は、私が 4 回生だった昭和 35 年の秋、京大が当番校となって開催された地球電磁気学会講演会である。3 日間の日程の中で、越冬中の昭和基地で遭難された福島紳会員の追悼式が行われた。学会会長としての挨拶なのか、福島会員の出身校で、かつ開催地である京都大学を代表しての挨拶なのかは記憶に無いが、福島さんのご尊父や報道陣の見守る中で田村先生が追悼の辞を述べられたが、やはり「あの快活な福島君は、今は無い…けれどもが一しかしー」になってしまった。「困っておられるな」と案じていたら、何とか「願わくば、靈魂ここに留まりてー」にワーブしたのでほっとした。友人の挙式で仲人を務められた際も、「新郎が試みている学術的な挑戦は、コロンブスの新大陸発見に続き、世界一周に挑んだマゼランに匹敵するようなもの」と言おうとされたが、肝心のマゼランという名前が出てこない。世界史に親しんでいる出席者は推定したであろうが、そうでない人には、新郎がやろうとしていたことは、アメリゴ・ベスブッチなのかバスコダ・ガマに近いのか判らないままであった。

このように挨拶や演説はお好きでない田村先生であったが、文人墨客として凄い才能をお持ちだった。電気工学科出身で大気電気学専攻といえば、フランクリンやファラデーの直系というイメージが先行し、詩文だの書画だのには縁遠い学者と思われそうだが、意外な側面があったのだ。現役時代は多忙な研究生生活で写生もままならなかったが、その趣味を退官後に集大成されたのが、大量のスケッチに歴史的な解説文を散りばめた「紅柄の町、吹屋の思い出」の出版である。先生は、岡山県吉備高原に位置する吹屋町（現在は合併で高梁市成羽町吹屋・同坂本・同中野）のご出身であり、その生家のメンテナンスのため毎年夏に帰省されていた。その際に生家周辺や町の文化遺産を丹念に描いてこられた水彩画をまとめられたのだ。

改めて紹介する必要はないであろうが、ここは江戸時代より吹屋銅山で知られる鉾山街であり、明治に至ると硫化鉄鉾石を酸化・還元させて赤色顔料の紅柄（べんがら、酸化第二鉄）を製造する町としても有名になった。吹屋集落のベンガラ格子と石州瓦による赤褐色の重厚な商家の町並みは、昭和49年に岡山県の「ふるさと村」の指定を受けた。ちょうど先生が自費出版を試みられた頃である。またお亡くなりになる少し前の昭和52年には岡山県初の、国の重要伝統的建造物群保存地区に認定された。かたじけないと思ったのは、先生の「文人墨客出版」は、身近なお弟子さんもほとんど頂いていないのを知った時だ。私のように関東で勤務する元弟子が何故拝受したのか判らないが、私も兵庫県にある実家のメンテナンスに大童であり、帰省すればそれだけで多忙なのに、やがて消滅するに違いない郷里の風景や家屋を撮りまくって雑誌のグラビアを毎年飾っていたから「同好の弟子」に認知して下さったのかも知れない。

田村先生が天へ還られた時、遠隔地で勤務していた私は参列できず、東京へ転勤になってから下鴨のご自宅へ、中学生になっていた長男を同行して弔問に伺った。そして田村先生と同じく鉄道ファンの長男は電気機関車の本を頂き、私は雷の洋書を頂いた。奥さまは、「よかったら全部持って行って下さい。三人の子供もその孫も誰一人、雷研究や鉄道研究に興味を持っていませんので本が可哀そうです」と仰ったが、後から来る弔問客に「徳田が書庫を荒らした」と思われたら大変だから辞退した。田村先生からの贈り物は、「吹屋の思い出」だけで十分である。それは、生い立ちの思い出と郷土の遺産への愛着が絵と文に滲み出ている得難い書籍であった。

ここに昭和36年3月の卒業記念の写真がある。写っているのは前列左側から、河波秀次助手、前田 担助教授、田村雄一教授、速水頌一郎教授、佐々憲三教授、西村英一教授、三木晴男教授、小澤泉夫助教授、中列左から、光田 寧助手、小川俊雄助手、島 通保助手、（ここから学生）徳田八郎衛（電磁気）、石束昌治（測地）、秦 昌樹（海洋）、後列左側から、奥西一夫（海洋）、西 勝也（海洋）、山崎純一（第4講座）、島田充彦（第4講座）、荒木 徹（電磁気）、奥澤隆志（電磁気）の面々である。



写真：卒業記念写真（昭和36年3月）